

早春

豊島与志雄

青空文庫

もともと、おれは北川さんとは何の縁故もない。街で偶然出逢っただけのことだ。

牛の煮込み……といっても、おもに豚の腸や胃や食道、特別には肝臓と心臓、そのこま切れを竹串にさして、鉄鍋でぐらぐら味噌煮にしたものだが、その鍋をかこんでアルコールを飲むという、この頃たいへんはやっている安直な飲み屋が、近くの街角に一つあつた。

おれも時々鍋をつつつきに寄つた。気むずかしそうな大人たちがいなない場合は、コップ一二杯飲むこともあつた。そこで、初めて北川さんに逢つた。帽子はかぶらず、マントにちび下駄の姿で、

髪を短かめに刈った頭がへんに大きく見え、浅黒くて艶のわるい顔は善良そうだった。年は三十五六で、飲みっぷりがよかった。

鍋の物はあまり食わず、焼酎……つまりアルコールの薄めたのを、二杯ほどあおって、あとは清酒のお爛したのをうまそうに飲んだ。飲みながら店の親爺と話をした。

「身投げのことを、絵や文章には、真逆様に飛びこむように書いてあるが、あれは嘘だよ。男でも女でも、逆様になんかなかなか飛びこみはしない。せいぜい横っ倒しで、たいていは立ったままの姿勢さ。水泳の飛び込みとは違うからね。やっぱり怖いんだな。或る時、寒い所で、女が身投げをしたことがあった。飛びこんだのが池で、氷がはりつめてたもんだから、両足は水にはいったが、

大きな尻が氷につかえて、どうにも身動きが出来ず、もがいてるところを救いあげられた、という話があるよ。」

「へえー、ほんとですか。」

「ああ、実話だよ。」

そんな話をする彼を、おれは、文学者か画家かでもあろうと思つた。——ところが違つていた。中学校の先生だつた。もつとも、ちよつとした読物ぐらいは書いていたんだが。

飲んでしまうと、御馳走さんと大きな声で言つて、出て行つた。おれは親爺に聞いた。

「あの人、金を払わないね。」

「今日は持つていないらしいよ。またこんど、と小さい声で言つ

たろう。持つてる時に、いっしょに払うよ。」

「それはいいなあ。おれもそうしよう。」

「お前なんか、だめだ。あぶなくつてね。」

そんなことでおれはどうやら彼を好きになつたらしい。そして何度か出逢つてるうちに、彼のところに病人があつて生魚に不自由して困つてゐることを知り、時々生魚を届けてやることにした。牛の煮込み屋から遠くない所で、静かな裏通りの古い小さな家だつた。彼は……北川さんは、おれのような小僧つ子を信用して、五十円ぐらいずつ先渡ししてくれた。その五十円も無い時があつた。

「今日は金がないよ。二三日して来てくれ。」

それから二三日すると、ふしぎに金が出来ていた。もつとも、おれの方でも、北川さんところでは、口銭はいつさい取らないことにはしていたし、煮込み屋の親爺と同じように、掛売りの気前も見せてやった。

或る時、北川さんはおれに尋ねた。

「君は、本を読むことがあるかね。」

「そりやあ、僕だつて、ありますよ。」

「いや、本を読むのが好きかと言うんだよ。」

「好きですよ。」

そんならこれを読んでみろと言って、少年雑誌をおれにくれた。北川さんはへんに嬉しそうだった。道理で、雑誌には北川さんの

名前のついてる読物がのつていた。

おれには大して面白くもなかった。だが、その中のちよつとした話には、あとで思い当ることがあった。これは大事なことで、北川さんの文章をそっくり写すといいんだが、雑誌をなくしてしまつた。

話というのは、どこか山の温泉のことで、若い娘が一人、坂道の上に立っていた。坂道といつても、そこら全体が山腹で、はるかの谷間まで草原の斜面なのだ。

——その遠い低いところ、草原のはてに、一つぽつりと、黒いものが見えた。何だろうか、娘はそれを見つめた。黒い一点は、動いていた。だんだんこちらに近づいてくるらしい。たいへんな

速さで、こちらへやってくるらしい。次第に大きくなった。馬だつた。人が乗っていた。馬も人も黒く見えた。それが、たいへんな勢いで、たいへんな速さで、草原を駆け登ってきた。ますます近づいてくる。ますます大きくなる。下方の谷間を流るる川や、そのあたりの畑地や、杉の木立など、パノラマのような美しい背景のなかに、人馬が大きく浮きだして、それが草原をいつさんに駆け登ってくる。五百メートル、三百メートル……あ、もうすぐ目近に來た。怪物のように大きくなった。それがまっ黒で、機関車のように突進して來た。ぶつつかつた……と思つたとたんに、娘は地面に倒れたが、馬はまるで影か霧のように、すーつと通りすぎていつた。

こんな話、おれには何のことかよく分らなかつた。お伽話でもないし、お化け話でもないし、いささかばからしくも思えた。北川さんもその当座、おれの批評など求めはしなかつた。——それが、実は、病人の頭から醸し出されたものだつたんだ。

北川さんはまだ独身で、家庭には、年とつた母と若い妹がいた。病人というのは妹のことで、その姿をおれが見たのは事件が起つてからのことだ。

おれはただ生魚を時々持つていった。おれは魚屋じゃない。戦災で親たちが田舎へ引き込んだあと、一人東京に残つて、まあ謂わば植木屋の手伝いみたいなことをしていた。忙しい仕事もめつたにないし、あちこちに手蔓があるものだから、物品の仲立ちも

少しはやった。大人でなくて小僧っ子なもんだから、却って便利がられた。けちな仕事だが、金は相当にもうかった。

ところで北川さん……はつきり言えば北川辰治は、ちよつと文学者めいたところのある人だが、それでいて少しも気むずかしくはなく、至極のんびりしていた。どうして中学校の先生なんかしているのか分らなかつたが、外になにもすることがなかつたからだろう。貧乏なのか金持ちなのか見当がつかなかつた。十円札一枚もないこともあれば、新らしい百円札をたくさん持つてゐることもあつた。

おれが識り合つたのは一月の半ばで、それからずっと寒い日が続いた。梅の花の咲くのが後れた。そして三月になつた或る日の

こと、へんなことが起つた。春先のせいかな。

おれはいつものように、生魚を少し北川さんへ届けた。裏口からはいつて、台所へ声をかけたが、返事がない。なんども呼んでいると、庭の方から北川さんがやって来た。作業服みたいな姿で、地下足袋をはいている。

「ああ、君か。よく来たね。」

おかしな挨拶だが、その訳はすぐに分つた。北川さんは魚をしまつてから言つた。

「今、君は暇かい。」

「なんか用ですか。」

「よかつたら、ちよつと手伝つて貰いたいんだが……。」

梅の木を植える手伝いだった。物置小屋を廻つてゆくと、鍵の手になつてゐる建物が、わりに広い庭をかかえている。庭師の手にかけた庭ではないが、百日紅や野薔薇や八手や檜葉や椿などが、広場の向うを限つてゐる。その片端のところ、穴が掘りかけてあり、大きな梅の木が塀に立てかけてあつた。背は低い、手入れの届いたみごとな古木で、散り残つた花がまだ少し残つており、根廻りを大きく取つてあつて、北川さん一人ではとても扱えそうになかつた。そこへ持ち込むにも、板塀を越させたんだろう。

「いい木ほくですねえ。どうしたんです。」

「貰い物なんだ。」

茶の間とおぼしい方の縁側に、まだ学生でもあろうかと見える

青年が腰掛けていた。頭髮を長く伸ばし、ホームスパンの背広を着こんだ、顔の蒼白い好男子だった。

北川さんは鋏を探しに、おれまで物置小屋へ引っぱってゆき、声をひそめて手短かに話した。

「実は、弱ってるんだよ。」

——あの青年は、竹中貞夫といって、知らない間柄ではない。

彼から頼まれたということで、一昨日、運搬屋が梅の木を持ちこんできた。そして昨日、彼自身やって来た。北川さんの妹の梅子に、梅の木を贈る約束をしたから、それを果すんだと言う。梅子に聞けば、そんな約束は覚えがないと言う。それでも竹中は約束したと言ひ張り、あの木を庭に植えるまでは帰らないと、腰を落

着けてしまった。とうとう昨夜は泊りこんだ。今朝になると、早く梅の木を植えようと催促する。父や母も来ることになってるから、あの木がここに植えられたのを見たら、喜ぶだろうと言う。ほんとに両親とも来ることになってると言う。

「そんな筈はない。」と北川さんは言った。「少し気がへんじやないかと思うよ。」

おれには話がよく分らなかつた。もっと詳しい関係を聞いてみた。

——竹中のうちは資産家で、昔、北川さんの父がたいへん世話になつたことがある。そのの、老夫人が体が弱く、人手も足りないので、暫くの間、梅子が手伝いに行つていた。小間使というと

ころか。そして昨年の秋、夫人は梅子を連れて、伊豆の湯ヶ島にちよつと保養に出かけた。その族館の主人と懇意なのだ。すると、あとから貞夫がやって来た。貞夫は馬が好きで、近くに乗馬を一頭見つけだし、天城山麓を乗り廻した。或る日、その馬が狂奔した。低空を飛んでた飛行機に驚いたのか、走り去った数台のトラックに慍えたのか、道を横切った鼯に化かされたのか、とにかく、つつ走った。道の真中で貞夫を待ってた梅子は、貞夫が馬を駆けさせてるのだとばかり思った。目近になって、貞夫の様子に気がつき、慌てて避けようとして転んだ。手をすりむいただけですんだ。馬は飛び越して行つた。だが、貞夫は落馬して、さらに崖から落ち、可なりの傷を負つた。

そういうことで、おれは北川さんの書いた話を思い浮かべた。

——湯ヶ島から帰つても、貞夫は気分がすぐれず、時々病院に通つていた。そのうち、梅子が病気になつて、自家へ戻つてきた。気管支肺炎から肋膜炎までわるくし、高熱を出した。だが幸に、もう殆んどなおりかけている。貞夫から何度か手紙が来たようだった。然し、二人の間に恋愛関係はないらしく、あつても大したものではあるまい。

「それだけのことだ。」と北川さんは話を打ち切つた。

「それでまあ、梅の木は植えることにしたよ。樹木は大切にしてやらなければならんからね。」

「妹さんと仲がいいんですか。」とおれは聞いてみた。

「誰と……。」

「その竹中さんですよ。」

「あまり口数は利かず、静かに応対していた。そうして梅子と話してる時は、少しも変ったところは見えないがね。」

「ほんとにいくらかふれてるんですか。」

「それがどうも、確かには分らない。君もちよつと探ってみてくれよ。まだ若いが、君には、民衆の智慧があるだろう。つまり、健全な常識がある筈だ。」

おれは物置小屋の外におり、北川さんは小屋の中にひっこんで、話をしていた。そしておれはへんな気がした。北川さんも少しどうかしてるんじゃないかと思つた。

「とにかく、仕事を片付けましょうよ。」

「そうだ、そうだ。」

北川さんは鍬を探しだして来た。おれたちは仕事にかかった。庭の土は思ったより柔かで、たやすく穴が掘れた。それへ梅の木を据えこむ段になって、竹中さんも立ち上つて来て、加勢をした。梅の木の向きについて、うるさくいろいろなことを言った。それが一々もつともなのが、素人にしては、ふしぎだ。植付けを終えると、梅の木はそこにみごとな枝ぶりを示した。太枝に花が少し残ってるのだけが、却つてぶざまだった。

木を眺めながら、縁側に腰かけて茶を飲んでみると、竹中さんはじっとおれの方を見つめた。いつまでも見つめている。そして

言った。

「君は誰ですか。」

丁寧な口の利き方だ。おれがためらっていると、北川さんが答えた。

「僕の従弟ですよ。」

「従弟さんですか。初めてですね。」

おれの方で冷りとした。ジャンパーにゴム靴なんかの姿が顧みられた。だが、彼はもう北川さんと話しだした。

「あの枝は切った方がいいですね。」

「どれですか。」

「あの、こちらへ伸び出してるやつ……。」

「そう。ちと邪魔ですね。だが、若い枝のようだから、実はなるでしようよ。」

そこで、梅はいったい花の方が大切か実の方が大切かという話になって、禅問答のようなことが続いた。

「僕はたくさん実のなる梅が好きですね。」と北川さんは言った。「僕はたくさん花の咲くのが好きですね。」と竹中さんは言った。

それは議論じゃなくて、別々のことを勝手に言ってるような調子だった。どちらも、相手の言うことなんかまるで気にもとめず、独語をしてるみたいだ。側で聞いていると、おれはおかしかった。気がへんだとすれば、二人ともそうではないかと思われた。

そのうちに、お母さんが帰って来た。北川さんは物蔭でお母さ

んとなにか話し合つた。そこで、おれは歸つてゆこうとしたが、北川さんから呼びとめられた。

「ちよつと、使いをしてくれないかね。」

北川さんは紙幣をおれに渡して、牛の煮込み屋から酒を一升ほど買つてきてくれと言つた。ついでに、二百円ほど借りがあるか
ら払つてくれと言つた。

「母が金を拵えてきてくれたから、助かつたよ。」

北川さんは嬉しそうに笑つた。

「借りてきたんですか。」とおれは思わず言つてしまった。

北川さんはおれの顔をじつと見て、それから、さも重大な秘密でも洩らすように囁いた。——小さな貸家をも一つ持つていたが、

それを、親戚に頼んで、買って貰った。十万円になった。但し、借家人がはいっているのです、それが立退いて空け渡しするまでは、月々三千元ずつ貰うことになっている……。

それで、北川さんの暮し向きのおれにも分つたが、ちょっと淋しかった。そんな売り食いの仕方は自慢になるもんじやない。だが、北川さんは自慢そうな笑顔をしているんだ。

おれが眉根をしかめてみると、北川さんは何を勘違いしたか、おれの肩を一つ叩いて言った。

「とにかく、梅の木を持って来てくれたんだから、酒でも出さなくちやなるまい。それに、両親が来るというから、そうなつたら、ちと大変だ。米も足りないし、御馳走はなにもないし……ひとつ

奔走してくれよ。」

言うことは道理だが、考えの根本がどうもおかしい。竹中さんにかぶれたのかも知れない。

「万事引き受けますよ。」

安心さしておいて、おれはまず、牛の煮込み屋の用だけは果してやった。だが、それだけで逃げるわけにもゆかない。なんだか気の毒だ。度が少し曲りかけてるお母さんを手伝って、台所の用をしてやった。

ささやかな酒宴がはじまった。竹中さんもいけるたちらしい。

酒がまわるにつれて、妙な話題が出てきた。おれは台所の用をすまして、縁側に置いてある電熱器で、手製の煎餅をやきながら聞

いていた。

——世の中は隙間だらけだというのだ。原子とか分子とかいうものにも、隙間がある。そういうもので出来てる物質も、隙間だらけだ。——天井にも床にも、壁にも、隙間がある。塀にも隙間がある。——人の注意にも、隙間がある。心にも隙間がある。——だから、そういう隙間をねらえば、どんなことだって出来る。大きな木だって持ち出せる。人間だって持ち出せる。

まあこんな風な、何もかもごっちゃにした話だが、中心はどうやら、あの梅の木にあるらしかった。あれは竹中さんの庭にでも植わってたもので、それをひそかに持ち出す興味と苦心とが、面白かったのだろう。——そんなことを問題にしてる竹中さんは、

たしかに気が少しへんだ。話にのつてる北川さんも、謂わば共犯者で、ちつとおかしい。

然しその話は、終りまで続かなかつた。玄関に人が来て、お母さんは暫く話をし、それから、玄関と茶の間との間を往復して、その人を茶の間に通した。

竹中家のいろんな用をしてる番頭格の、山口という人だった。痩せた小柄な中年者で、禿げあがった額の下に、小さな眼が鋭く光っていた。一目見た時からおれはこの人が嫌いになった。山口さんなどとはどうしても言えない。山口と呼び捨てにするより外はない。

山口は一座に会釈をして、言った。

「これは、お邪魔を致します。わたくしはただ、貞夫さんだけにお目にかかれれば宜しいので、外に用はございません。」

最初から角のある言い方だ。おれはどきりとした。だが不思議だった。当の竹中さんも、北川さんも、黙りこんだだけで、平気な顔をしている。

山口は竹中さんの方を向いて、ずばりと言った。

「あなたをお迎えにあがったんですが、お帰りなさいませうね。」

「ああ帰るよ。」

おれにまで丁寧な竹中さんとしては、これはまた至極ぞんざいだ。山口は大きく頷いた。

「それで安心致しました。御両親もたいそう心配しておられますし、これから……。」

「あ、お父さんとお母さんは、いつみえるかね。」

山口は小さな眼をしばたいた。

「こちらへ来られることになっていたが……。」

「とんでもないことを仰言います。わたくしが代理でお迎えにあがったんでございますよ。」

両親が来るといふような竹中さんの言葉は、山口の憤慨を爆発させたらしい。彼は俄にまくし立てた。言い廻しは丁寧だが語調は荒かった。——昨日から貞夫が帰らないので、家の者は心配していた。貞夫はまだ充分に病気がなおってもいないし、物騒な時

節柄だ。気をもんでいると、一昨日、庭の梅の古木を、植木屋が掘り返して、どこかへ運んだことが分った。それが貞夫の指図だ。植木屋をつきとめて、こちらだという見当がついた。それで、迎えに来た。いったい、どういう量見だったのか。梅の木の一本や、二本、惜しくはないが、なんで泥坊みたいな真似をするのか。誰かにそののかされたのか。来てみると、しゃあしやあと酒なんか飲んでいゝ。茶屋小屋ならまだしも、ここがどういう家か、よく考えてみたら分る筈だ。もと邸にいた娘の病氣見舞いなら、見舞いのような方法もあるろう。こちらだつて迷惑だろう。近所に電話がないわけではあるまいし、泊まるなら泊まると、邸に電話でもするのが当り前なのを、いつまでも引き留めて酒のもてなしをす

るなど、以ての外だと、非難されても仕方がなく、そういう迷惑をこちらにかけては済むまい……。

山口は竹中さんに向ってだけ話したのだが、次第に、北川さんへのあてつけが多くなった。直接に北川さんへは口を利くまいと決心してるようだ。その全体が、特別な話し方で、真綿に針を包んでいる。

北川さんと竹中さんは、黙りこんだまま、知らん顔をして、煙草をふかし酒を飲んでいた。お母さんは奥の室の病人の方へ行つた。おれはいらいらしてきた。煎餅をこがした。

庭にはもう夕陽が薄らぎかけていた。山口はそちらへ眼をやつ

て、梅の木を見付けた。

「ほう、梅はやはりこちらへ来ているようですねあ。」

山口は無遠慮に立つて来て、縁側の硝子戸を大きく開けて、庭を眺めた。

その時、これもやはり隙間なのか、竹中さんは北川さんに小声で言った。

「お邪魔しました。これで失礼します。」

お辞儀をするとすぐ、竹中さんは立ち上って、実にす早く、廊下へ出てしまった。山口が振り向きかけたとたんに、おれは言った。

「寒いなあ。」

大きく開けてある硝子戸を、力一杯にぶつつけてやった。真鍮のレールで滑りがよかった。その戸をまともに受けて、山口はよろけ、縁外に飛び落ちた。

「乱暴な……。」

山口はおれの方を見たが、おれはそっぽを向いていた。彼は何と思つたか、それきりで、額と腰をさすり、縁にはい上つて、足袋底の泥を丁寧にくすり落した。それから席に戻つて、室の中を見廻した。誰も口を利かなかつた。

玄関の方に竹中さんとお母さんの声がした。山口は出て行つた。竹中さんはもう帰りかけていた。

二人を送り出して、お母さんは茶の間に来た。

「おかしな人ですよ。つかつかとはいつて来て、梅子の枕もとに坐つて、早くおなおりなさい、きつとなおります、そう言つて、両手をついてお辞儀をしました。可哀そうに、梅子が、ほろりと涙をこぼしたときには、もう室から出て行きかけていました。どういうんでしようねえ。」

お母さんは立つたまま話したが、それきりで、病人の方へ行つた。

北川さんは黙りこんで酒を飲んだ。そしておれにもすすめたので、遠慮なくおれも飲んでやった。

北川さんがへんに考えこんでるので、おれは気を利かせて、やがて出て行つた。北川さんとなにか話したいことがあるようだつ

だが、それも諦めて、忘れた。

それでも、やはり気になって、翌朝、行つてみた。

台所で、お母さんが食事の仕度をしていた。おれは梅の木を見に行つた。朝日がいつぱいさしてゐるあちらの縁側の、硝子戸の中に、北川さんと妹さんが何か話していた。

おれは梅の木を見上げた。いろいろな思いが絡んでるので、身内のような気がした。

北川さんが硝子戸をあけて、おれを呼んだ。

「よく来たね。」

昨日と同じ挨拶だ。はればれとした顔をしていた。

だが、それよりも、おれはびっくりした。梅子さんがとても美しかった。近くで見たのは、いや、ほんとに逢ったのは、初めてだ。梅子さんは日向にひきずりだした布団の上に、脇息にもたれて坐っていた。髪はおさげにして編んでいる。縹袍にくるまった体はひどく細そりしている。ほんの少女という恰好だ。でも顔は一人前の女で、朝日の光りを受けてるせいか、肌が透き通ってるように見える。眼が黒々として底が分らない。下頬にぽつりと肉のふくらみがあつて、小さな受け口だ。その全体がおれにはびっくりするほど美しく思われた。兄さんには殆んど似ていない。そして探せば、額と耳が似てるぐらいだろう。

おれがびっくりして梅子さんを見ていると、北川さんは言った。

「梅子は、君を医者よりも頼りにしてるよ。薬より魚の方が好きだからね。」

おれは顔が赤くなるのを感じた。

「ほんとに、いつも有難いと思つていますの。」

そう言つて、梅子さんは黒々とした眼でじつとおれを見た。おれはへんに口が利けないで、眼を伏せた。

「その代り、お前の、童話を読ませてやったよ。」と北川さんは言つた。「そら、お前が考えて、僕が書いたやつさ。」

梅子さんはただ笑つていた。

おれはそこにばかりのように突つ立つてるのがつらくなつて、お辞儀をして去ろうとした。すると、北川さんから呼びとめられた。

「実は、君にまた頼みたいことがあるんだがね。」

「ええ、なんでもしますよ。」

「おかしなことだが、あの梅の木なんだ。」

北川さんは暫く口を噤んだ。

「あれを君にあげるから、いいように始末してくれないかね。薪なんかにしてしまうのは可哀そうだから、どこかに植えて、やはり生かすという貰いたいんだ。とにかく、あれをまた掘り起して、ほかへ移すんだ。費用は出すから、頼むよ。」

「あすこに置いといては、いけないんですか。」

「折角のものだから、貰い受けるつもりだったが、あんなことがあつては……。あの嫌な奴さ、あんな奴に汚されては、僕はもう

嫌になった。話をすると、梅子も嫌だと言う。どこか遠くへ持つて行つてくれよ。」

おれは首垂れてしまった。初めは意外だったが、その意外が意外でなくなり、北川さんや梅子さんの気持ちがおれの中にもはつきり伝わってきた。

「分りました。」

おれはそれだけ言つて、くるりと向きを変え、梅の木を眺める風をした。そして眼を手の甲でこすつた。涙が出てきてこらえきれなかった。

なんで悲しいのか、おれにもよく分らなかつたが、胸がつまつて涙が出るんだ。梅子さんがあまり美しかったからだろうか。春

先の感傷のせいだろうか。

おれはそこらを歩きまわって涙をぐまかした。それから、梅の木はおれが貰ってやろうときめた。

青空文庫情報

底本：「豊島与志雄著作集 第四卷（小説4 [#「4」はローマ数字、1-13-24]）」未来社

1965（昭和40）年6月25日第1刷発行

初出：「苦楽」

1947（昭和22）年5月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2008年1月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

早春

豊島与志雄

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>